

日本豚病研究会創立20周年を迎えて

藤崎優次郎（日本豚病研究会長）

平成14年（2002）は日本豚病研究会の創立20周年に当たります。そこで、これを機会に、本研究会の生い立ちや発足当時考えられた研究会の運営方針を紹介させて頂き、また20年の歩みを振り返り、併せて今後の研究会のあり方などについてお話させて頂きたいと思っております。

私の記憶によりますと、今から約35年前、昭和42年（1967）頃、現在の動物衛生研究所の前身である農林省家畜衛生試験場が東京都小平市にあった時代、試験場の豚病関係者が時折集まり、その時々問題になっている豚の疾病を取り上げて話し合う豚病問題懇談会という勉強会がありました。この勉強会がいつ頃から始められたのか、という点については、私が最初から参加していたとは言い切れないので、定かではありませんが、当時におけるこの勉強会は、とくに会則などはつくらず会報もだすこともない自由に話し合う不定期な集まりであったように記憶しております。実は、この豚病問題懇談会が現在の日本豚病研究会の母体になっております。

私が豚病問題懇談会の世話役をお引受けしたのは、今から22年前の昭和55年（1980）のことでした。私が引き継いだ時の記録によると、この懇談会は、その時までに過去21回行われたことになっておりました。つまり年に1～2回開かれていたわけです。昭和54年（1979）に家畜衛生試験場の本場が小平市から筑波研究学園都市に移転したのを機会に懇談会の体裁を整え発展させたらどうかという話が関係者の間で持ち上がりましたので、昭和57年（1982）4月に初めて会則をつくり豚病研究会として正式に発足させることにいたしました。たまたまその時、私が世話役をしていたので会長をお引受けしたような次第です。

只今お話したように、この研究会の生い立ちには、非常に古い歴史がありますので、それを尊重して、豚病研究会の研究集会の開催回数は、この研究会の母体となっている豚病問題懇談会の開催回数から引き続き通し番号で数えることにいたしました。いっぽう、会報は昭和57年（1982）に豚病研究会として新しく発足したときに第1号を発行することになりました。研究集会の開催回数と会報の号数が符号していないのは以

上のような理由によるものです。

さて、昭和57年（1982）4月に会則をつくり豚病研究会として正式に発足したわけですが、ここで、当初私ども関係者が考えたこの研究会の性格について簡単に触れさせて頂きたいと思っております。まず第一は、家畜衛生関係の研究会は学会等を含めて数多くあるので、あとから始める後発の研究会は、既存の研究会とは性格的に、また内容的に異なったものでなければ意味がないので、先発の学会や研究会とは違った特徴を持たせる工夫が必要であるということです。第二は、当時の豚の疾病は既に複合要因によって起こるものが多いと考えられたことから、新しく発足する研究会はインターセクショナルな、いわゆる学際的なものにすべきであるということです。第三は、現場を重視することを基本方針とし、養豚現場ですぐ役立つような話題やトピック的話題を、できるだけ多く取り上げていくということです。

この研究会は概略以上のような運営方針を立てて発足したのですが、もちろん初めから固定した枠を設けてしまったわけではなく、その時の状況を踏まえて弾力的に運営してまいりました。会員数は、発足当時は約50名でしたが、年々増加し10年後には1,000名を越す大きな研究会に発展しました。また賛助会員も発足当初は9法人でしたが、発足後は多数の法人に加入していただくようになりました。このことは本会の運営方針が大筋で多くの豚病関係者のご賛同を得てきた結果ではなかったかと思っております。

昭和62年（1987）5月には研究会の名称を「豚病研究会」から現在の「日本豚病研究会」に変更しました。また、会則を改正し、平成8年（1996）9月には日本学術会議から学術研究団体として承認されました。

さて、この研究会の主な目的は、会則にも書かれているように、豚病の診断・予防・治療に関する情報交換を行うことにより、養豚現場における疾病の防除に実際に役立つようなことを勉強することにあります。それには、まず野外における豚病発生の実態を常に把握しておくことが不可欠であり、また、診断・予防などに関する新しい技術を積極的に取り入れるように心掛けることも大事であります。

近年問題になっている豚病の中には複合要因によって起こるものが多いことは周知のとおりであります。感染症ひとつ取り上げてみても、単一の病原体についてのみ考えているのは、問題の解決につながらない場合が多く、その診断や予防については、いろいろな角度から検討し対処していく必要があります。たとえば、複数の細菌やウイルスについて調査しなければならないのはもちろんのこと、感染から発病にいたる宿主側の要因を解明したり、また飼養管理の方法を見直したり、さらには飼養環境の効果的かつ経済的な改善方法についても検討することが、きわめて重要な課題になっているものと考えます。

いっぽう食肉という面からは、消費者のニーズが多様化する中で、微生物や抗生物質に関しての安全性、また品質や価格に対する消費者の強い要望にこたえなければなりません。

これらの諸課題に対応していくためには、豚の飼養管理に関連する、いろいろな学問分野の新しい知識について、できるだけ広く習得しておくよう努めなければなりません。このことは、養豚現場に直接関係している者にとっては特に必要なことではないかと思っております。本会の研究集会の話題もそのような考え方に沿って取り上げられてきておりますので、自分の専門分野と多少異なる周辺領域の問題についても、この研究会を通じて勉強していただけたら幸いです。

ところで、わが国の養豚業を取り巻く環境は、貿易の自由化の進展など経済のグローバル化に加え、価値

観の多様化、さらにわが国全体の景気低迷によって、厳しい状況が続いており、この際さらに飼養管理技術の向上を図るとともに、経営の合理化を積極的に進めていかなければなりません。また最近では、牛の口蹄疫やBSEの発生もみられており、また海外で発生する新興感染症の国内への侵入の危険性も考えられるので、予期しない伝染病発生時の被害を如何に最小限にとどめるかという、いわゆる危機管理体制を早急に整備しておく必要があると考えます。

以上お話ししたような観点から、日本豚病研究会では、これまで獣医学分野のみならず畜産学分野あるいは農業経営学分野等にまたがる関連領域の話題も取り上げてまいりました。これからも本研究会は豚の疾病防除をターゲットとしてまいりますが、取り上げる話題については、いわゆる学際的な立場からそれを考えていく会としていきたいと思っております。研究集会の運営については、幹事会を中心に今後ともいっそう工夫をこらしていきたいと思っておりますが、先程お話ししたように、この研究会は現場重視をモットーの一つとしておりますので、会の運営とくに研究集会で取り上げる話題についてのご希望やご意見を事務局にお寄せくださるようお願いいたします。

最後に、日本豚病研究会を豚病研究の推進ならびにわが国養豚業の発展に役立つユニークな会として運営していくために、会員各位の多方面にわたるご協力とご支援をお願い申し上げ、本日の私のお話を終らせていただきます。